



晴天の心

立教186年7月号
大阪府富田林市寿町4-9-10
URL: www.tomiishi.net
TEL: 0721-23-3466 090-5243-4669



月次祭 7月19日 (水) 午前9時～

婦人会例会 7月9日 (日) 午前10時～



夏になれば花火大会が各地で行われますね。コロナ禍で人が密集するということから中止になっていましたが、今年は各地で開催されそうですね。

写真のような大きな花火は観ているだけで圧巻でなんだか気持ちがすっとするから不思議ですね。

最近はなかなか自宅で花火を楽しむ機会もないですが、子どもの頃、いろいろな花火を買ってきてもらって気がつけば残っているのが、地味な線香花火。



「線香花火 https://youtu.be/Yx_6bVZUmNA」でも、この線香花火を長く楽しむのは難しい。子どもの時は、じっとしてられないからつい揺らす。ジュッとって球が落ちて終わり。つまらないから別の花火を探すそんなことだったように思います。

少し大人になると、あの耐えるということと生まれてくる綺麗な花火を楽しむことが出来る。そして、晴れやかに咲く花火も少しづつ小さくなっていき小さな球になって

完結するまで楽しめるのはわずか。

人の人生もきっと、晴れ舞台に立って勇さんだところで晴れやかに活動しているときもあれば、じっと耐えて時を待つようなこともあると思う。人を助けるための準備をしている期間なのだと考えてころを倒さないで、旬を待ちましょう。きっと、潮目は変わります。明日を信じて生き生きと生きていこうじゃないですか。

「おやのことば おやのころ」

古代の人々も「昔は良かった」という表現を使っていた話是有名ですが、「明日がある」とか「くよくよするな」といった表現も人類の歴史と同じくらい古いものではないか。時々、そんなことを考えます。

この世界に生起する出来事のすべてには理由があり、そこには親神様の思召が反映されています。この道の信仰を心におさめたならば、もはや「心に掛かる」ことなど無くなるでしょう。

「心に掛かるから身に掛かる」
心に掛かるから身に掛かる。寝て目が醒めれば心に掛かる。心に掛かるのが神の邪魔になる。すっきり心に掛からんようにしたら安心であろう。

今日の
おやのことば



しかし、教理を知識としては理解していても、本当に教えを生きる糧とし、自らの生き方の方向性を変えていくことは、決して容易なことではありません。朝夕のおつとめの際に、毎日「さんげ」を繰り返しているのは、筆者だけではないでしょう。一体、いつになったら教祖に教えられた通りに、自分と世界を見詰めることができるようになるのか……。反省しない日はありませんが、「おさしづ」を拝読していると、先人の方々もさまざまなお諭しを受けています。

「寝て目が醒めれば心に掛かる。心に掛かるのが神の邪魔になる」

この道の黎明期に力を尽くした先人の方々でさえ、このようなお言葉を絶えず戴いています。教祖を通して伝えられた真の人間としての生き方は、すぐに手が届くようでありながら、実際にははるか遠い所にある。決してあきらめることなく、求め続けていくことが大切でしょう。

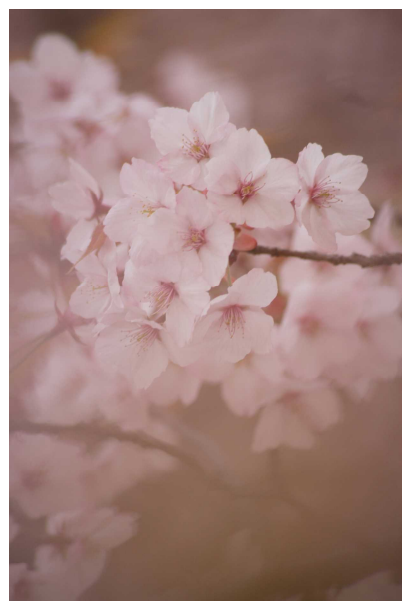
「すっきり心に掛からんようにしたら安心であろう」

きょうは少しでも、このような境地に近づくことができるでしょうか。(岡)

なつかしい未来

桜雨の中で
ふたりきりで見上げたでしょう
大きなあの木はもうここには
居ないけれどあなたはそばに居てくれる
子供の頃からね
ずっと夢見た温かな笑顔は
あなたの心に棲んでいた
なつかしい未来に
やっとたどり着くことができたよ
これからは僕があなたを
護る大きな木に育ちましょう
遠すぎたしあわせまで
もう少し辿りましょう
この道を

煌めく花びらが
吹雪のように日差しに舞い
大空に散りばめられてゆく
こうして今年の桜が去って行くのです
子供の頃からね
ずっと心で聴いたメロディーは
あなたの言葉に棲んでいた
なつかしい未来に
巡り会えたから生まれ変わる
これからはあなたを歌う
小さな歌になりましょう
遠すぎた幸せまで
もう少し辿りましょう
未来へ



先日発売されたさだまさしの新しいアルバム「なつかしい未来」。ちょっと不思議な言葉だと思いませんか？、未来がなつかしい？

昨年11月3日にグレープ50周年記念コンサートを行ったとき、1曲目が精霊流しだった、そのときさださんが、ギターでイントロを弾き出してリードギターの吉田さんがトレモロで寄り添ったときにこれだ！と。グレープ時代は、吉田さんのギターが素晴らしく上手で、さださんはギターがそれほどだった、今なら吉田さんのギターのテクニクに見合う演奏が出来るようになった。この未来をみる事が出来てなつかしいのだけどそのときは知らない未来。そう感じたそうです。そしてタイトルが決まったと。

アルバムの中に「夢の街」という曲がある。私も夢でしか行けない街がある。またこの街だここを登ると湖があって綺麗な風景に出会えると、覚めても覚えている街。いつもいけるとは限らない、いくつかの街がある、夢でしか会えない人もいる。そして、夢で伝えることもあると聞かせてもらおうと、あの夢で何を神様は伝えたかったのかと、心に掛かってしまい思案するのです。

教祖伝逸話篇

71.あの雨の中を

明治十三年四月十四日（陰曆三月五日）、井筒梅治郎夫婦は娘のたねを伴って、初めておぢばへ帰らせて頂いた。大阪を出発したのは、その前日の朝で、豪雨の中を出発したが、おひる頃カラリと晴れ、途中一泊して、到着したのは、その日の午後四時頃であった。

早速、教祖にお目通りさせて頂くと、教祖は、

「あの雨の中を、よう来なさった。」と、

仰せられ、たねの頭を撫でて下さった。更に、教祖は、

「おまえさん方は、大阪から来なさったか。珍しい神様のお引き寄せで、大阪へ大木の根を下ろして下されるのや。子供の身上は案じることはない。」と、

仰せになって、たねの身体の少し癒え残っていたところに、お紙を貼って下さった。たねが、間もなく全快の御守護を頂いたのは、言うまでもない。梅治郎の信仰は、この、教祖にお目にかかった感激とふしぎなたすけから、激しく燃え上がり、ただ一条に、にをいがけおたすけへと進んで行った。



72.救かる身やもの

明治13年4月頃から、和泉国の村上幸三郎は、男盛りのさ中というのに、座骨神経痛のために手足の自由を失い、激しい痛みにおそわれ、食事が進まない状態となった。

医者にもかかり様々な治療の限りをつくしたが、その効果なく、本人はもとより、家族の者も、奈落の底へ落とされた思いで、明け暮れしていた。何とかしてと思う一念から、竜田の近くの神南村にお灸の名医が居ると聞いて、要ったところ、不在のためガッカリしたが、この時、平素、奉公人や出入りの商人から聞いていた庄屋敷の生神様を思い出し、ここまで来たのだからとて、庄屋敷村をめざして帰って来た。そして、教祖に親しくお目にかからせて頂いた。教祖は、

「救かるで、救かるで。救かる身やもの。」と、

お声をおかけ下され、いろいろ珍しい、お話をお聞かせ下された。そして、かえり際には、紙の上に載せた饅頭三つと、お水を下された。幸三郎は、身も心も洗われたような、清々しい気持ちになって帰途についた。家に着くと、遠距離を人力車に乗って来たのに、少しも疲れを感じず、むしろ快適な心地であった。そして、教祖から頂いたお水を、

なむてんりわうのみこと、なむてんりわうのみことと、唱えながら、痛む腰につけていると、三日目には痛みは夢の如くとれた。

そして半年。おぢば帰りのたびに身上は回復へ向かい、次第に達者にして頂き、明けて明治14年の正月には、本復祝を行った。幸三郎42才の春であった。

感謝の気持ちは、自然を足をおぢばへ向かわしめた。おぢばへ帰った幸三郎は、教祖に早速御恩返しの方法をお伺いした。教祖は、

「金や物やないで。救けてもらい嬉しいと思うなら、その喜びで、救けてほしいと願う人を救けに行く事が、一番の御恩返しやから、しっかりおたすけするように。」と、

仰せられた。幸三郎は、そのお言葉通り、たすけ一条の道への邁進を堅く誓ったのであった。

陽気チャンネル 「行き当たりバッチリ！」

高橋伸実・松山町分教会長 <https://youtu.be/0m692zNM0eY>

天理教の教会に生まれたのに天理教に自信が持てなかったボク。

学校の先生のなりたかったのになれなかったボク。

そんな「ボクのころ」が、「親神様、どうぞボクをお使ください」と願い、

「行き当たりバッチリ！」「ああ、おやさま」と思えるようになるまでの心の動きを爽やかに語る。待望の陽気チャンネル初登壇。

